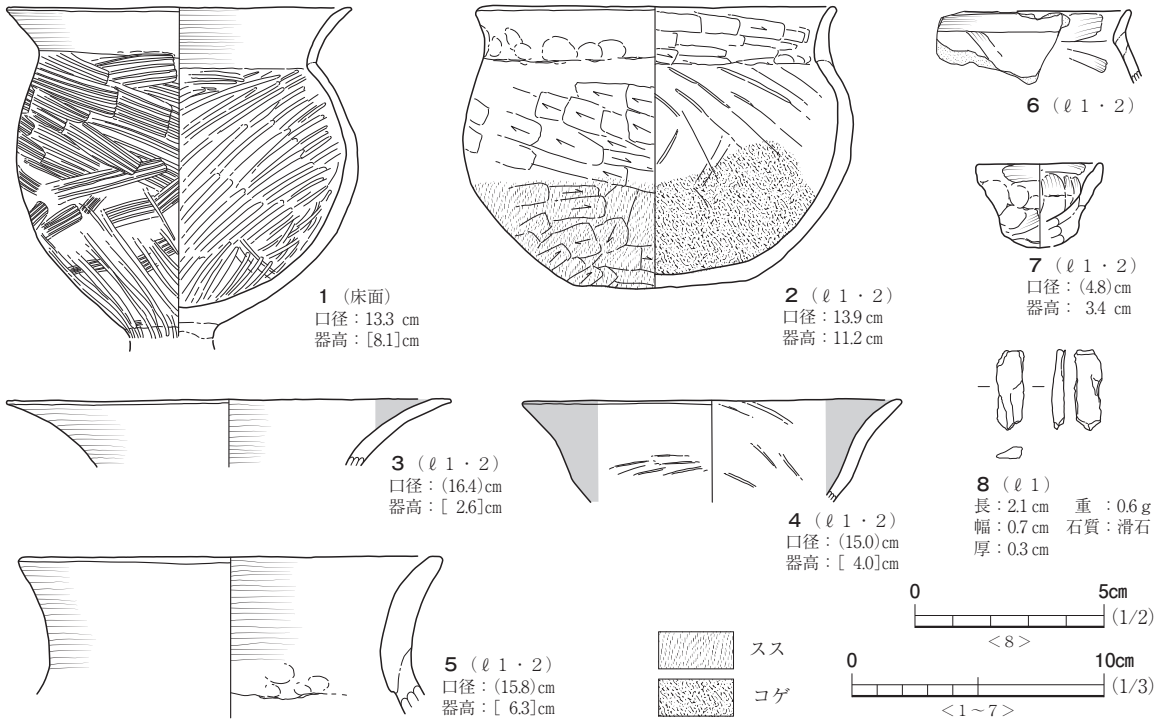



**図14**　５号住居跡出土遺物

状工具の圧痕が認められる。体部外面の下半にはスス、同内面の下半にはコゲが観察される。

図14－３は土師器の高杯と判断した。杯部とみられ、口縁部に向かって著しく外反する。内外面にはヨコナデが施されている。内面には赤彩が施されているが剥落が著しい。

図14－４は土師器の杯である。直線的な体部から口縁部に向かって外反する。内外面にヘラミガキ及び赤彩が施されている。

図14－５・６は土師器の甕である。５の口縁部はわずかに外反している。内外面にはヨコナデが施されている。外面には、円形の黒斑が観察される。６は小型で、口縁部は短く外傾している。外面にはヨコナデが施され、内外面にはユビナデが認められる。器壁の色調は赤褐色である。

図14－７は手づくね土器である。杯形で、内外面にはユビオサエやユビナデが認められる。

図14－８は剥片である。石製模造品の製作に伴う廃棄剥片とみられる。

**ま と め**

本住居跡の平面形は、不整な楕円形を基調としていたと考えられ、規模は南北方向で6.10ｍとなる。その所属時期は、床面から出土した台付甕（図14－１）の特徴から、古墳時代前期と考えられ、ℓ１・２から出土した土師器杯（図14－４）の特徴やℓ１から出土した滑石の剥片（図14－８）から、ℓ１・２は古墳時代中期から後期にかけて埋め立てられたとみられる。

## ６号住居跡　ＳＩ６

**遺　　構**（図15、写真17・18）

本住居跡は、115号水路調査区の中央部、115－16グリッドのＬⅡｂ上面で検出された。牛川か

ら南に115m程離れており、検出面の標高は9.2ｍである。他遺構との重複関係は認められない。周辺には、５・７～11号住居跡が密集して分布している。

本住居跡は、ＬⅡｂ上面の検出作業により褐灰色砂質土を基調とした不整形の範囲として確認した。ＬⅡｂと住居覆土の土質が近似しており、遺構の範囲が不明瞭であったことから、ＬⅡｅ上面まで掘り下げ、再度検出作業を行い住居跡として確認した。本住居跡の北東半部と南西隅部は、調査区外に位置している。

本住居跡の平面形は、検出された範囲から長方形を基調としている可能性がある。主軸方向はN12°Ｅである。規模は西壁が遺存値で2.81ｍ、南壁が遺存値で2.01ｍ、南北方向で4.94ｍ、検出面から床面までの深さは最大20㎝を測る。西壁は急な角度で、南壁は緩やかな角度で立ち上がる。

住居内堆積土は２層に分けられた。ℓ１は褐灰色砂質土塊を微量に含む褐灰色砂質土で、ＬⅡｂに近似している。ℓ２は褐灰色砂質土塊を微量に含む灰色砂質土で、いずれも人為堆積と判断した。

床面はほぼ平坦に構築されている。貼床や掘形は認められず、掘り込んだＬⅡｆを床面としている。Ｐ１の南側の床面には、長軸長約20㎝の楕円形の範囲に粉状の石屑が薄く堆積していた。

本住居跡に付属する施設として、床面からピット１基（Ｐ１）を検出した。Ｐ１は住居跡中央より南側に位置し、平面形は楕円形で、長径27㎝、短径20㎝、深さ19㎝を計る。堆積土はＬⅡｄを由来とする灰色砂質土で、橙色土粒や炭化物粒を微量に含んでいる。土質の性状から人為堆積と判断した。その性格は不明である。

**遺　　物**（図15、写真53・83）

本住居跡からは土師器89点、石器２点が出土した。このうち、土師器２点、石器１点を図示した。

図15－１・２は土師器の杯である。１は丸底の深身な椀形で、体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外傾する。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。底部外面には、ヘラケズリが施されている。体部から底部の内面には、ヘラナデやユビナデが施されている。２は平底で、体部は外傾し、中位で屈曲して口縁部が外反気味に直立する。屈曲部の外面には強い稜を持つ。外面の体部から底部にかけては、ヘラケズリが施されている。内面にはヘラミガキが認められ、口縁部は斜位に、体部は放射状に施されている。内面全域と口縁部外面には、赤彩が認められる。体部外面には、浅い連続した擦痕や、断面が「Ｖ」字状の深い溝状の研磨痕が認められることから、土師器転用研磨具と判断した。

図15－３は剥離のある原石である。側縁から１度の打撃を加え、剥離を行っている。礫面には、わずかに流水による円磨が認められる。

**ま と め**

本住居跡の平面形は長方形を基調としていたと考えられ、規模は南北方向で4.94ｍとなる。本住居跡は、床面に粉状の石屑が分布していること、蛇紋岩の原石や土師器転用研磨具が出土していることから石製模造品や臼玉の製作に関連した工房跡と考えられる。その所属時期は、出土遺物の特徴から、古墳時代中期から後期、５世紀後半～６世紀前葉と考えられる。

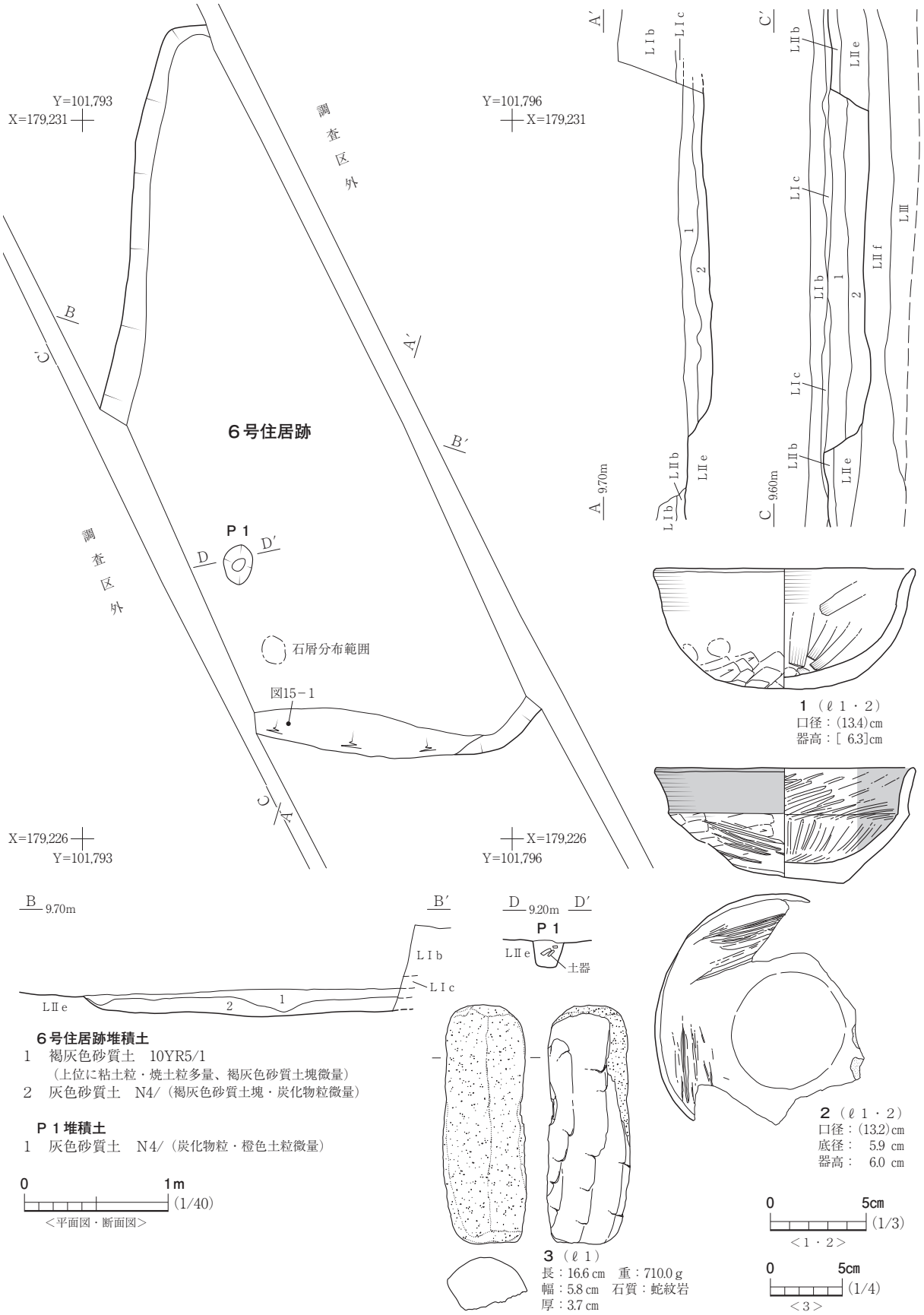



**図15**　6号住居跡・出土遺物

## ７号住居跡　ＳＩ７

**遺　　構**（図16、写真19・20）

本住居跡は、116号水路調査区の東端部、116－９グリッドのＬⅡｂ上面で検出された。牛川から南に130ｍ程離れており、検出面の標高は9.10ｍである。５号土坑と重複しており、本住居跡が古い。東側には、６・８～11号住居跡が密集して分布している。西隅部は、後世の撹乱により遺存していない。

本住居跡はＬⅡｂ上面の検出作業により、橙色粘土塊を含む灰色土を基調とした方形の範囲として確認した。北西部と、南隅部は調査区外に位置している。

本住居跡の平面形は、検出された範囲から方形を基調としている可能性がある。主軸方向はN33°Ｅである。規模は東壁が遺存値で2.41ｍ、北西－南東方向が遺存値で3.04ｍ、検出面から床面までの深さは最大18㎝を測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は３層に分けられた。ℓ１は上位に橙色粘土塊や焼土粒・炭化物粒などを微量に含む灰色土である。ＬⅡｂに近似している。住居全体を覆う人為堆積土である。ℓ２は黒褐色土塊を微量に含むにぶい褐色粘土で、床面の東側にのみ堆積していた。ℓ３は白色粘土粒や焼土粒、炭化物粒を微量に含む、ＬⅡｅを由来とする暗灰色土で、掘形埋土である。

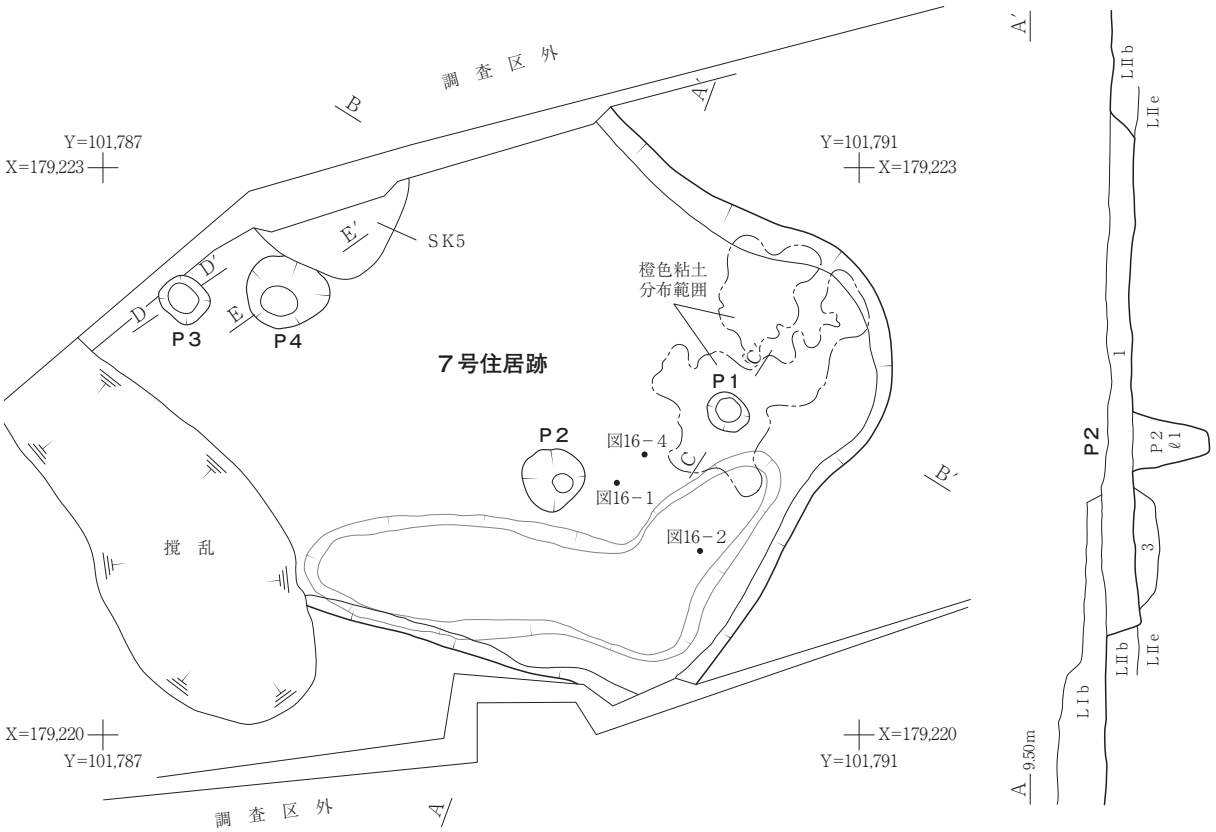
床面はほぼ平坦に構築されている。大部分はＬⅡｅを床面としている。掘形は南壁と東壁に沿って、平面形が「Ｌ」字形の溝状に構築される。規模は長さ3.10ｍ、幅64㎝、深さ13㎝である。住居東隅部の床面からは橙色粘土と住居内堆積土ℓ１を混合した土が面的に認められた。

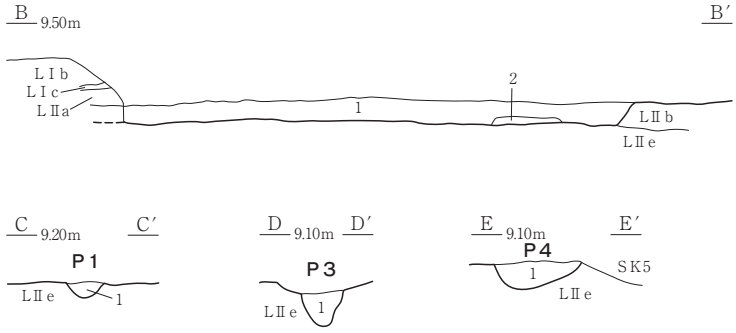
本住居跡に付属する施設として、床面からピット４基（Ｐ１～４）を検出した。Ｐ１は住居中央より東側に位置する。平面形は楕円形で、長径22㎝、短径19㎝、深さ10㎝である。堆積土は橙色粘土粒を多量に含む、灰色土の単層である。住居内堆積土ℓ１に土質が近似することから、住居とともに埋め立てられたと判断した。Ｐ２は住居の中央に位置する。平面形は不整な方形で、直径32㎝、深さ41㎝である。堆積土は焼土粒や炭化物粒を微量に含む、ＬⅡｆを由来とする暗灰色粘土の単層である。Ｐ３は住居の西側に位置する。平面形は方形で、直径26㎝、深さ18㎝である。堆積土はＬⅡｆを由来とする暗灰色土とＬⅡｅを由来とする褐灰色砂質土の混合土である。Ｐ４は住居の西側に位置する。５号土坑の掘り込みにより東側の上端は遺存していない。平面形は楕円形で、長径44㎝、短径39㎝、深さ14㎝である。堆積土はＬⅡｆを由来とする暗灰色土である。土層の性状から人為堆積と判断した。いずれのピットも性格は不明である。

**遺　　物**（図16、写真53）

本住居跡からは土師器234点、弥生土器１点、土製品１点、金属製品１点が出土した。このうち、土師器５点、土製品１点、金属製品１点を図示した。

図16－１～３は土師器の杯である。１は丸底の深身な椀形で、体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。底部外面には、ヘラケズリが施




**7号住居跡堆積土**

1　灰色土　N4/（橙色粘土塊・焼土粒・炭化物粒微量）
2　にぶい褐色粘土　7.5YR6/3（黒褐色土塊微量）
3　暗灰色土　N3/（白色粘土粒・焼土粒・炭化物粒微量）

**P1堆積土**

1　灰色土　N4/（橙色粘土粒多量）

**P2堆積土**

1　暗灰色粘土　N3/（焼土粒・炭化物粒微量）

**P3堆積土**

1　暗灰色土　N3/（褐灰色砂質土との混合土）

**P4堆積土**

1　暗灰色土　N3/（灰白色砂質土粒多量）

0　1m　(1/40)
＜平面図・断面図＞

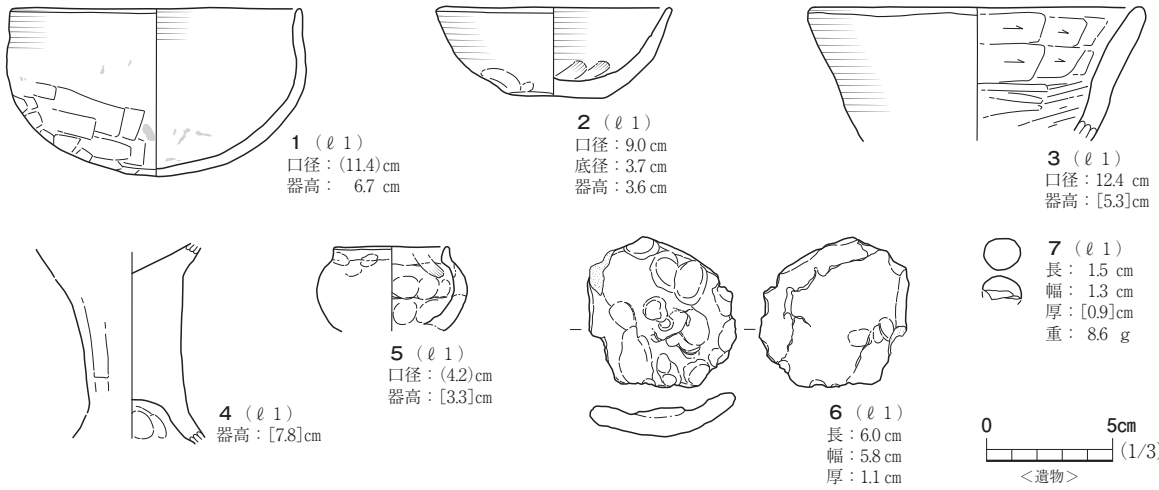



**図16**　7号住居跡・出土遺物

されている。内外面には、ごくわずかに赤彩の痕跡が認められる。２は平底で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。底部外面には、ヘラケズリが施されている。３は厚手で、体部から口縁部に向かい直線的に立ち上がる。外面にはヨコナデが施されている。体部内面には、横位のヘラケズリやヘラミガキが連続して施されている。

図16－４は土師器の高杯である。脚部は中実で、外面にはヘラケズリ、内面にはユビオサエが施されている。

図16－５はミニチュア土器の壺である。体部は球形で、口縁部は短く直立する。内外面には、ユビオサエが認められる。

図16－６は土製円板とした。平面形は不整な円形で、断面形は弧状となる。ユビオサエにより、粗雑に整形している。表面中央には、粘土粒が貼付けられる。

図16－７は火縄銃の弾である。鉛製とみられ、一部は欠失している。後世に混入したものである。

**ま と め**

本住居跡の平面形は、方形を基調としていたと考えられ、規模は北西－南東方向が遺存値で3.04ｍとなる。その所属時期は、出土した土師器の特徴から、古墳時代中期から後期、５世紀後半～６世紀前葉と考えられる。

## ８号住居跡　ＳＩ８

**遺　　構**（図17、写真21・22）

本住居跡は、115号水路調査区の中央部、115－15グリッドのＬⅡｂ面で検出された。牛川から南に115ｍ程離れており、検出面の標高は9.2ｍである。他遺構との重複関係は認められない。周辺には、５～７・９～11号住居跡が密集して分布している。北隅部は、後世の撹乱により遺存していない。

本住居跡は、ＬⅡｂ上面の検出作業により灰色土を基調とした不整な楕円形の範囲として確認した。平面形が不明瞭なため、一部はＬⅡｅ上面まで掘り下げ、検出作業を行った。当初は性格不明遺構として調査を開始したが、床面から炉跡とみられる焼土範囲を検出したことから、住居跡として取り扱うこととした。西半部は調査区外に位置している。

本住居跡の平面形は、検出された範囲から不整な楕円形を基調としている可能性がある。規模は南北方向が遺存値で4.32ｍ、検出面から床面までの深さは最大22㎝を測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は２層に分けられた。ℓ１は橙色粘土塊や炭化物粒を微量に含む灰色土である。基調とする土はＬⅡｅに近似している。住居の上位を覆う人為堆積土である。ℓ２は橙色粘土粒や炭化物粒をごく微量に含む灰色砂質土である。住居の床面を覆う人為堆積土である。

床面はほぼ平坦に構築されている。貼床や掘形は認められず、大部分が掘りこんだＬⅡｅを床面としている。

本住居跡に付属する施設として、床面から焼土範囲３箇所（焼土範囲１～３）を検出した。床面が面的に被熱している状況や周辺に炭化物が確認できたことから、炉跡と考えられる。焼土範囲１は住居の北側に位置する。焼土範囲の中央には、炭化物と焼土の混合土が薄く堆積していた。平面形は円形で、直径24cm、厚さは最大５cmである。焼土範囲２は住居東壁の際に位置する。平面形は楕円形で、長径25cm、短径14cm、厚さは最大３cmである。焼土範囲３は住居東壁の際の焼土範囲２の南側に位置する。焼土範囲の周縁の一部には、炭化物が薄く堆積していた。平面形は不整な楕円形で、長径31cm、短径13cm、厚さは最大２cmである。

**遺　　物**（図17）

本住居跡からは土師器56点が出土した。このうち、土師器１点を図示した。

図17－１は土師器の壺である。頸部から口縁部に向かい外反している。調整は内外面ともに器

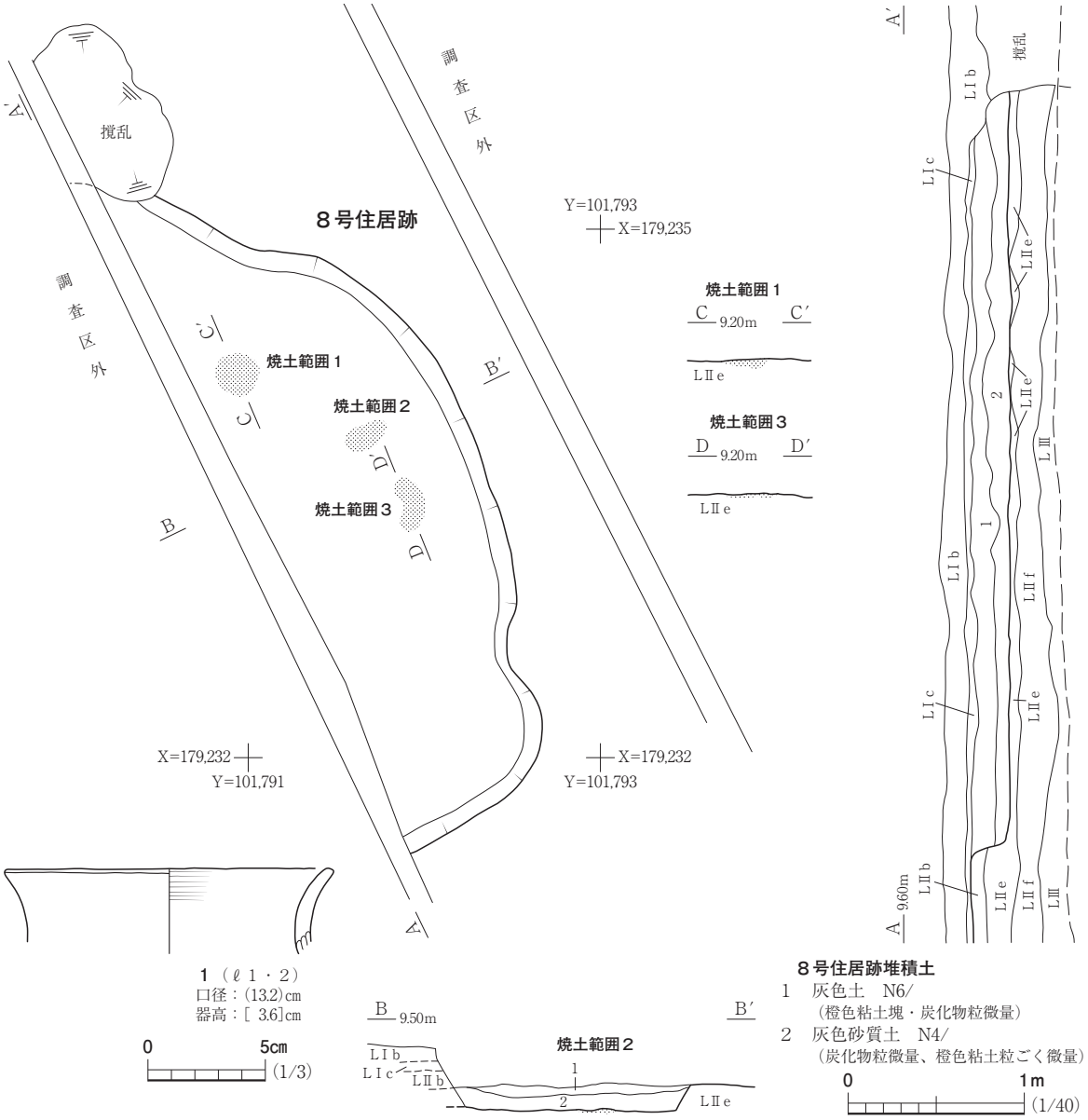



**図17**　８号住居跡・出土遺物

壁の剥離が著しく判然としないが、内面にはヨコナデが確認できる。

**ま と め**

本住居跡の平面形は、不整な楕円形を基調としていたと考えられ、規模は南北方向が遺存値で4.32ｍとなる。床面からは、炉跡とみられる焼土範囲が３箇所みつかっている。その所属時期は、出土した土師器の特徴から、概ね古墳時代中期から後期と考えられる。

## ９号住居跡　ＳＩ９

**遺　　構**（図18、写真23・24）

本住居跡は、115号水路調査区の中央部、115－16・17グリッドのＬⅡｅ・ｆ上面で検出された。牛川から南に120ｍ程離れており、検出面の標高は9.16ｍである。11号住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。周辺には、５～８・10・11号住居跡が密集して分布している。

本住居跡は、ＬⅡｅ上面の検出作業により橙色粘土塊を含む灰色土を基調とした方形の範囲として確認した。堆積土についてＬⅡｅに近似し、橙色土粘土塊の混じりが極めて少ない東半部は範囲の峻別が困難なことから、ＬⅡｆまで掘り下げを行い検出した。中央から南壁にかけては、調査区外に位置している。

本住居跡の平面形は、方形を基調としている。主軸方向はＮ８°Ｅである。規模は遺存の良好な北壁が3.35ｍ、東壁が2.95ｍ、検出面から床面までの深さは最大22㎝を測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は２層に分けられた。いずれもＬⅡｅを由来とする灰色土を基調とし、灰色細砂や炭化物粒を含む。いずれも土質の性状からＬⅡｅを用いて埋め立てられたものと判断した。

床面はほぼ平坦に構築されている。貼床や掘形は認められず、掘りこんだＬⅡｆを床面としている。北壁の中央付近の床面からは、橙色粘土塊や焼土粒がまとまって確認され、中には被熱した土師器甕の破片が多く含まれていた。カマドや炉に由来する土を２次的に集積した可能性がある。

本住居跡に付属する施設として、床面からピット１基（Ｐ１）を検出した。Ｐ１は住居跡東壁際の中央に位置する。平面形は楕円形で、長径33㎝、短径27㎝、深さ40㎝である。堆積土は、住居内堆積土と同質の灰色砂質色土で灰色細砂や橙色粘土塊を微量に含んでいる。住居と同時にＰ１も埋め立てられたと考えられる。位置や規模から、壁柱穴の可能性がある。

**遺　　物**（図18、写真53）

本住居跡からは土師器126点、弥生土器３点、土製品２点、石器２点が出土した。このうち、土師器２点、土製品１点を図示した。

図18－１は土師器の高杯である。脚部は中空で、外面にはヘラケズリ、内面にはユビオサエやユビナデが施されている。

図18－２は手づくね土器である。杯形で、ユビオサエにより整形されている。

図18－３は不明土製品とした。粘土板を左右の端から中央に向け折り曲げて成形している。

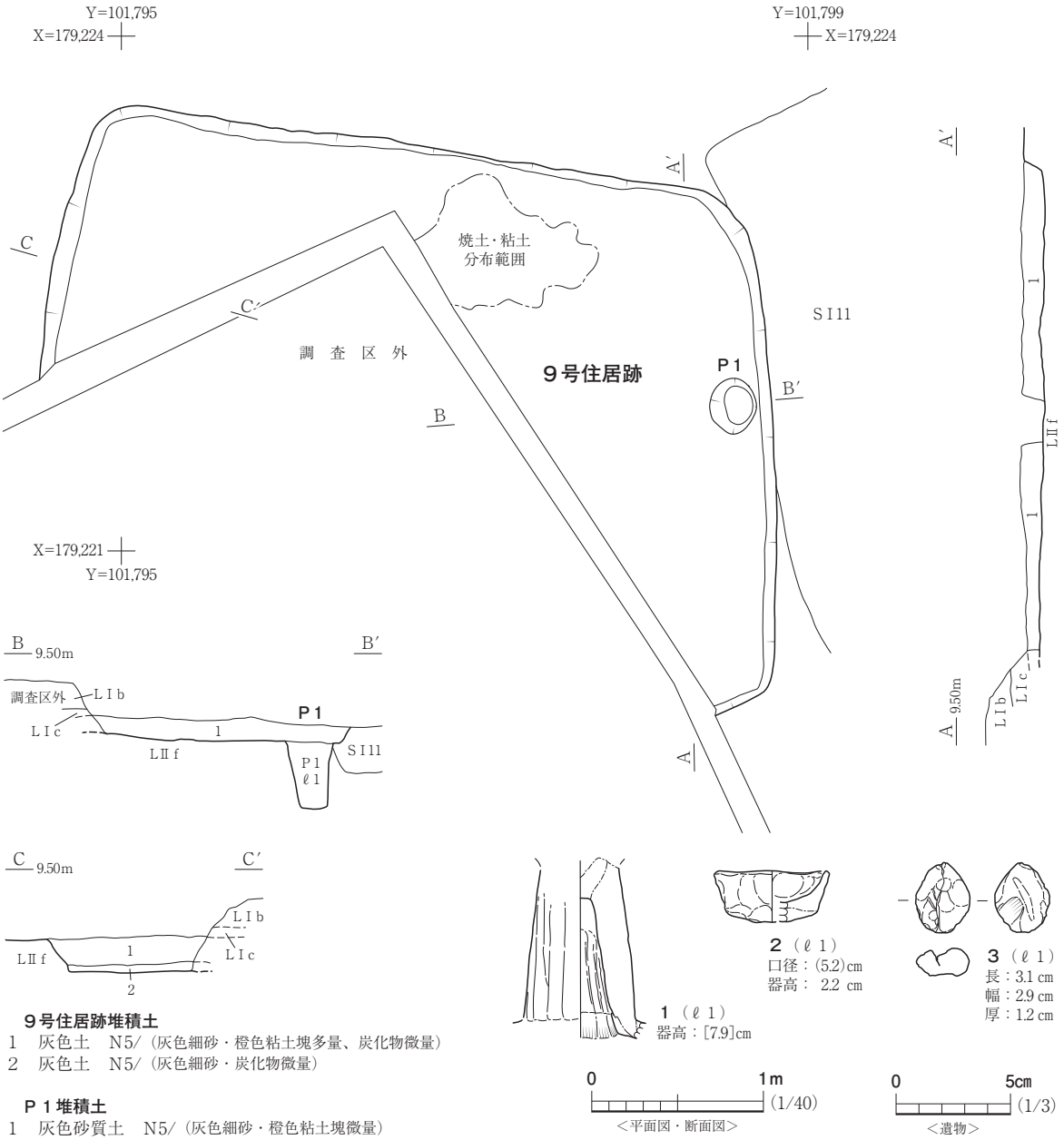



**図18**　９号住居跡・出土遺物

**ま と め**

本住居跡の平面形は方形を基調としていたと考えられ、規模は北壁で3.35ｍとなる。床面からは、橙色粘土塊や土師器甕の破片が集積されていることから、調査区外にカマドや炉などの施設が存在した可能性がある。その所属時期は、土師器の高杯（図18－１）の特徴から、古墳時代中期、５世紀代と考えられる。

## 10号住居跡　ＳＩ10

**遺　　構**（図19、写真25・26）

本住居跡は、115号水路調査区の中央部、115－17・18グリッドのＬⅡｅ・ｆ上面で検出された。

牛川から南に130m程離れており、検出面の標高は8.98～9.02ｍである。重複する遺構は無い。北側には、５～９・11号住居跡が密集して分布している。南側は後世の撹乱や掘りすぎにより遺存していない。

本住居跡は、撹乱土を重機で掘り下げた際炭化物が多く確認できたことから、重機による掘削作業を中断し、ＬⅡｅ上面の検出作業を行ったところ、炭化物を多量に含む褐灰色土を基調とした範囲として確認した。西側の大部分は、調査区外に位置している。

本住居跡の平面形は、確認できた範囲が狭く不明である。主軸方向はN46°Ｗである。規模は南

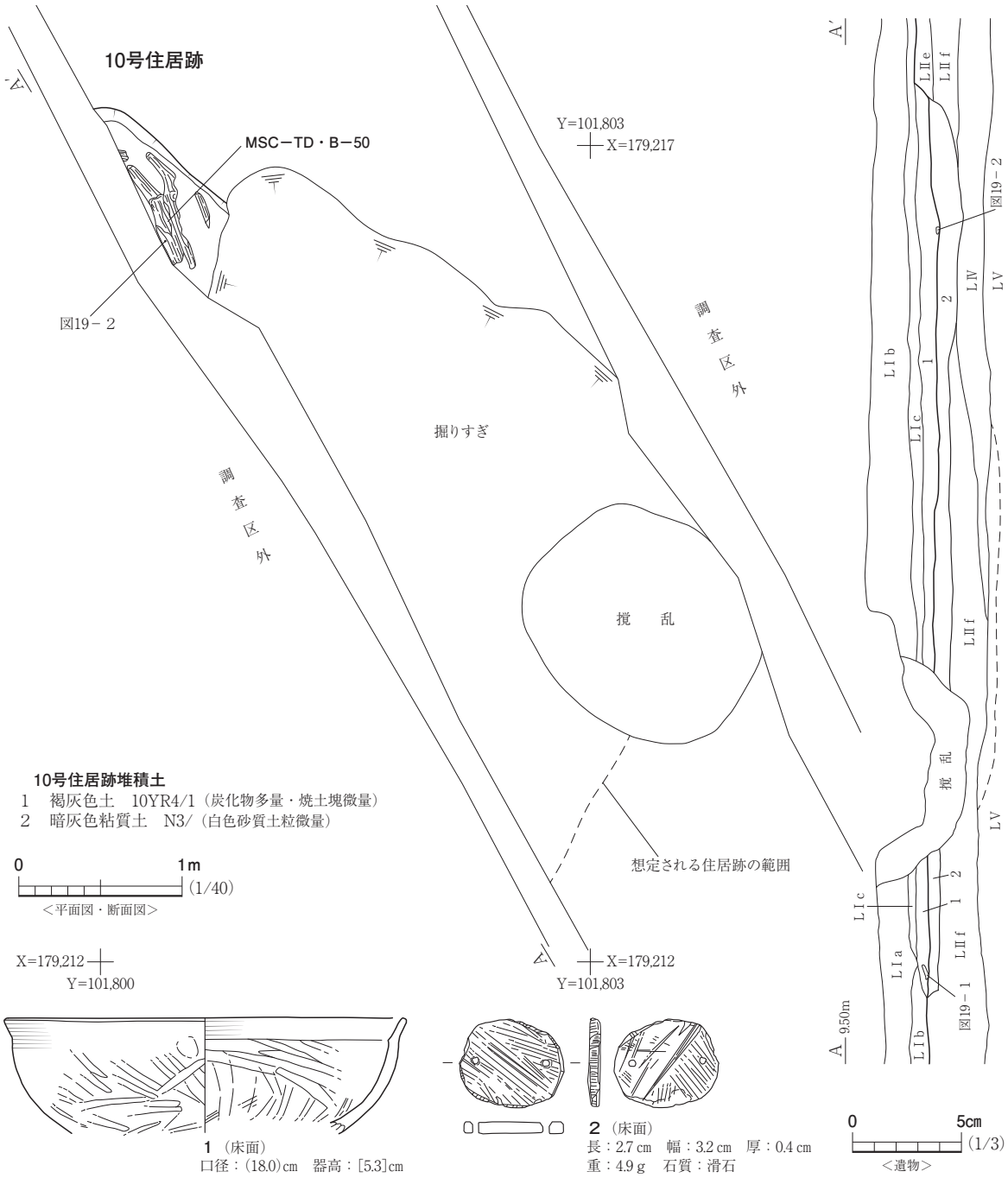



**図19**　10号住居跡・出土遺物

北方向で5.58m、検出面から床面までの深さは最大15cmを測る。周壁は確認できた範囲では、いずれも急に立ち上がる。

住居内堆積土は２層に分けられた。ℓ１は炭化物を多量、焼土塊を微量に含む褐灰色土で、住居床面を覆う人為堆積土である。ℓ２は白色砂質土粒を微量に含む暗灰色粘質土で、貼床である。

床面はほぼ平坦に構築されている。貼床は床面全体に構築される。深さは最大で17cmである。床面からは炭化材が多量に確認されており、住居の構築材とみられる。樹種同定を行ったところ、モミ属との結果を得た。本住居跡に付属する施設は確認できなかった。

**遺　　物**（図19、写真83）

本住居跡からは土師器８点、石製品１点が出土した。このうち、土師器１点、石製品１点を図示した。図19－２の有孔円板は、炭化材と床面の間から出土している。

図19－１は土師器の杯である。体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外傾している。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。体部の内外面にはヘラミガキが施されている。

図19－２は石製模造品の有孔円板である。円形で、左右の端部に２つの穿孔が施されている。裏面には、多方向からの研磨痕が認められる。

**ま と め**

本住居跡の平面形は不明で、規模は南北方向で5.58ｍとなる。住居の堆積土からは住居の構築材とみられる炭化材が多量に出土していることから、消失家屋とみられる。床面からは石製模造品の有孔円板が出土していることから、家屋内で祭祀が行われた可能性がある。その所属時期は、土師器の杯（図19－１）の特徴から、古墳時代中期、５世紀後半と考えられる。

## 11号住居跡　ＳＩ11

**遺　　構**（図20、写真27・28）

本住居跡は、115号水路調査区の中央部、115－16・17グリッドのＬⅡｆ上面で検出された。牛川から南に120m程離れており、検出面の標高は9.04ｍである。９号住居跡と重複しており、本住居跡が古い。周辺には、５～10号住居跡が密集して分布している。

本住居跡は、ＬⅡｆ上面の検出作業により炭化物を多量に含む黒褐色土を基調とした方形の範囲として確認した。東半部は、調査区外に位置している。

本住居跡の平面形は、検出された範囲から方形を基調としている。主軸方向はN20°Ｗである。規模は西壁が遺存値で3.32m、南壁で遺存値1.54m、検出面から床面までの深さは最大12cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。

住居内堆積土は３層に分けられた。ℓ１は黒褐色土を基調とし、炭化物が多量に含まれ、帯状に堆積していた。白色粘土粒や焼土粒を微量に含む。ℓ１′は白色砂質土や炭化物粒を微量に含む褐灰色土である。住居中央部付近にのみ堆積していた。ℓ１″は焼土を主体とするにぶい黄橙色土で、炭化物粒や黒褐色土粒を微量に含む。いずれも土質から人為堆積と判断した。ℓ２・３は掘形の埋

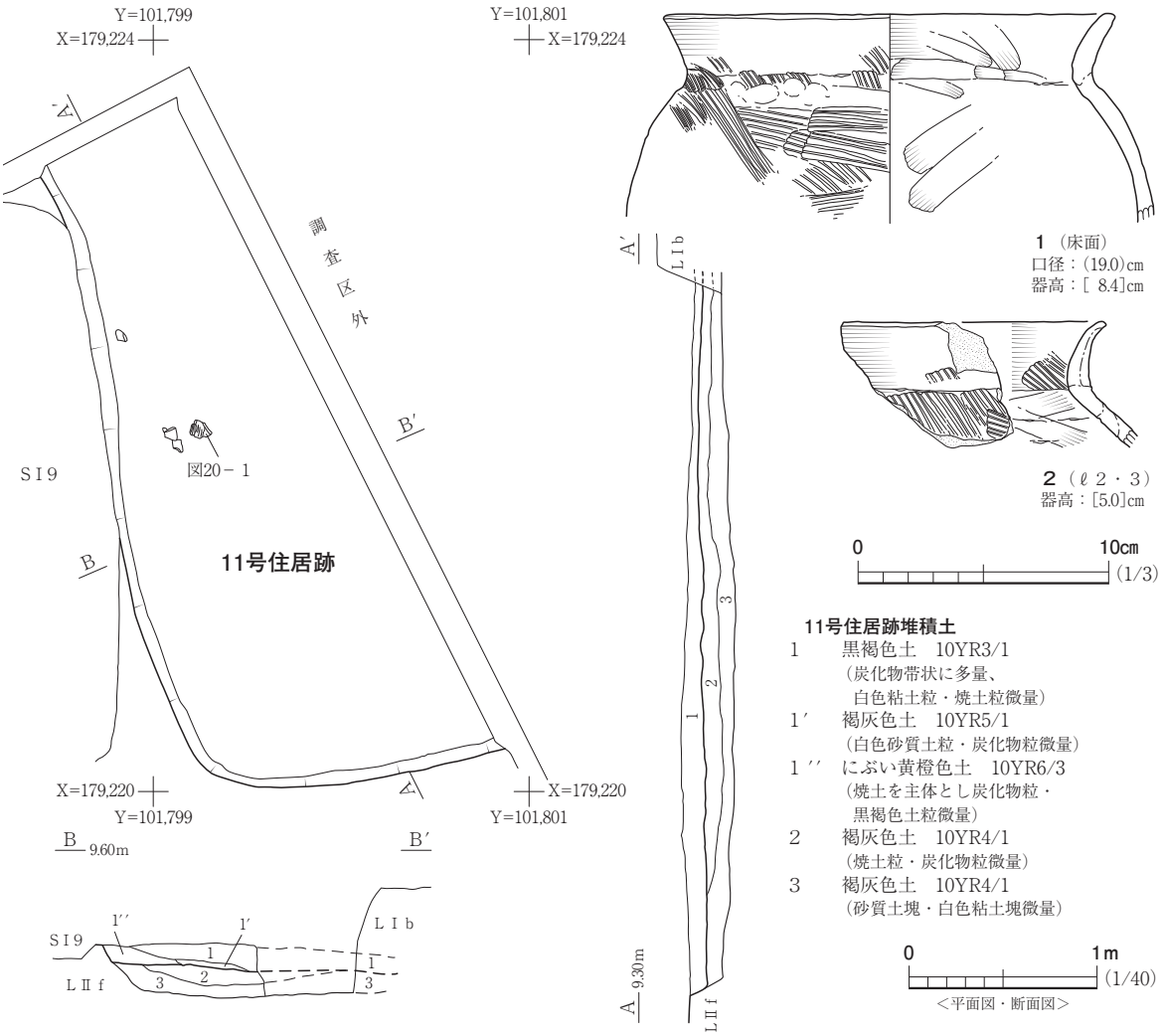



**図20**　11号住居跡・出土遺物

土で、ＬⅡｅを由来とする褐灰色土を基調とする。ℓ２は焼土粒や炭化物粒、ℓ３は砂質土塊・白色粘土塊を微量に含む。

床面はほぼ平坦に構築されている。掘形全体を埋め立て床面としている。本住居跡に付属する施設は確認できなかった。

**遺　　物**（図20、写真54）

本住居跡からは土師器77点が出土した。このうち、土師器２点を図示した。

床面からは図20－１の土師器の甕が破片で出土している。

図20－１・２は土師器の甕である。１は体部は緩やかに湾曲し、頸部から口縁部にかけて緩やかに外傾している。口縁部の内外面にはヨコナデが施される。体部の外面にはハケメが、内面にはユビナデが施されている。２は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反している。口縁部の内外面にはヨコナデが施される。体部の外面にはハケメが、内面にはユビナデ、ハケメが施されている。

**ま と め**

本住居跡の平面形は方形を基調としていたと考えられ、規模は西壁が遺存値で3.32mとなる。そ

の所属時期は、出土した土師器の甕（図20－１・２）の特徴から、古墳時代前期と考えられる。

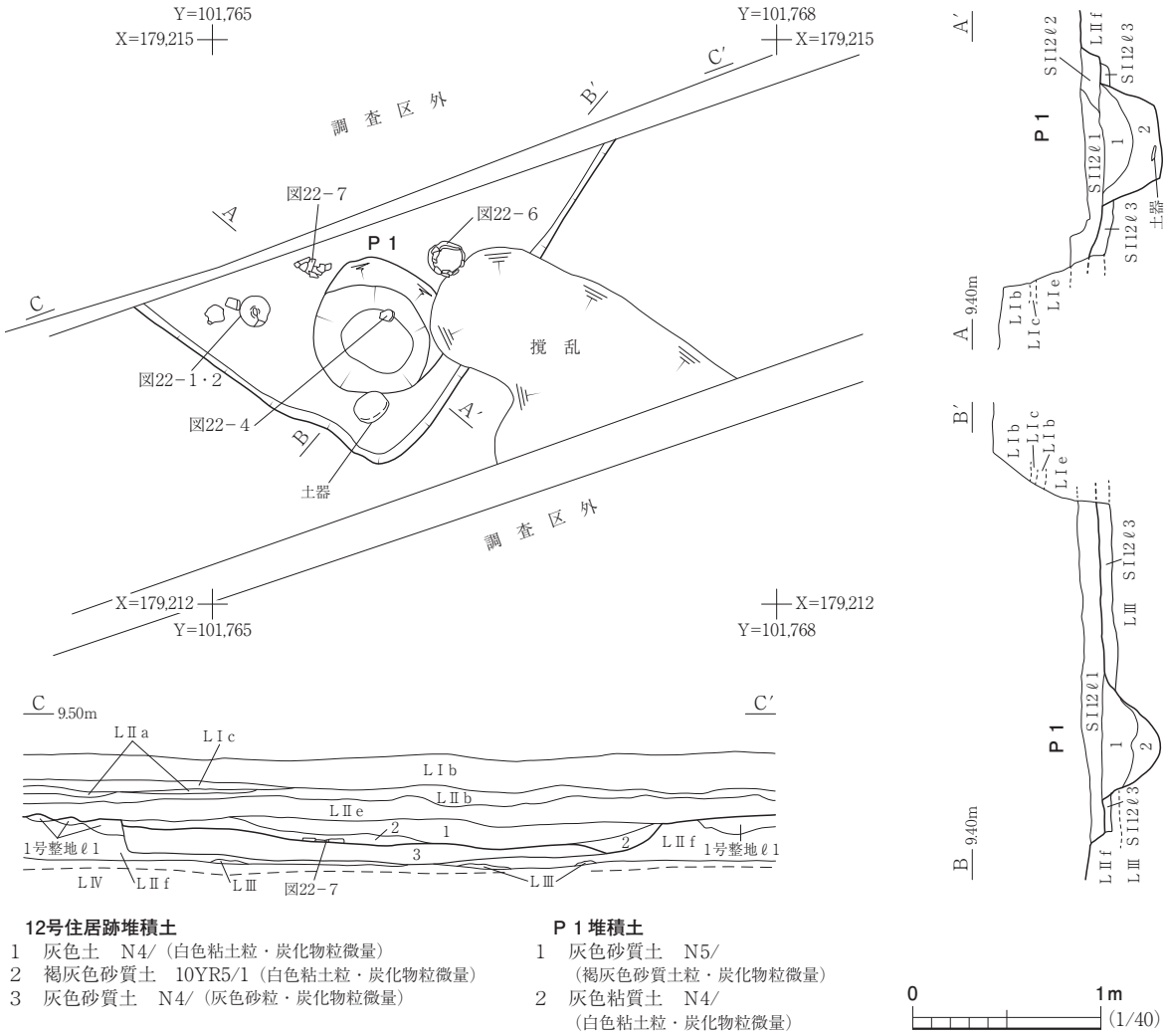
## 12号住居跡　ＳＩ12

**遺　　構**（図21、写真29・30）

本住居跡は、116号水路調査区の東部、116－７グリッドのＬⅡｆ上面で検出された。牛川から南に150m程離れており、検出面の標高は8.88～8.94mである。１号整地範囲と重複しており、本住居跡が新しい。東側８mには、７号住居跡が位置している。東壁の一部は、後世の撹乱により遺存していない。

本住居跡は、ＬⅡｆ上面の検出作業により白色粘土粒などを含む灰色土を基調とした方形の範囲として確認した。大半は調査区外に位置しており、南隅部のみを確認したに留まる。

本住居跡の平面形は、検出された範囲から方形を基調としている可能性がある。主軸方向はN33°Ｅである。規模は東壁が遺存値で2.14m、南壁が遺存値で1.54m、検出面から床面までの深さは最大14cmを測る。周壁はいずれも急な角度で立ち上がる。




**12号住居跡堆積土**
1　灰色土　N4/（白色粘土粒・炭化物粒微量）
2　褐灰色砂質土　10YR5/1（白色粘土粒・炭化物粒微量）
3　灰色砂質土　N4/（灰色砂粒・炭化物粒微量）

**Ｐ１堆積土**
1　灰色砂質土　N5/
（褐灰色砂質土粒・炭化物粒微量）
2　灰色粘土　N4/
（白色粘土粒・炭化物粒微量）

**図21**　12号住居跡

住居内堆積土は３層に分けられた。ℓ１はＬⅡｆを由来とする灰色土で、白色粘土粒や炭化物粒を微量に含んでいる。住居東側を覆う人為堆積土である。ℓ２は褐灰色砂質土で、白色粘土粒や炭化物粒を微量に含んでいる。土質は1号整地範囲ℓ１に近似している。ℓ３は灰色砂粒や炭化物粒を微量に含む灰色砂質土である。ＬⅡｆを由来とする粘性のある土に灰色砂粒を混和して、堀形の埋土に用いている。土質の性状は、１号整地範囲ℓ１に近似する。

床面はほぼ平坦に構築されている。掘形全体を埋めたて床面としている。掘形の深さは最大で14cmである。

本住居跡に付属する施設として、床面からピット１基（Ｐ１）を検出した。Ｐ１は住居の南隅部に位置する。東側の一部は後世の撹乱により遺存していない。平面形は方形で、直径70cm、深さ31cmである。堆積土は2層に分けられた。ℓ１は褐灰色砂質土粒や炭化物粒を微量に含む灰色砂質土である。住居ℓ２に近似することから、住居と同時に埋め立てられたと考えられる。ℓ２は白色粘土粒や炭化物粒を微量に含む灰色粘土である。底面に向かうほど、白色粘土粒が含まれる割合が増す。規模や位置から貯蔵穴と判断した。

**遺　　物**（図22、写真54）

本住居跡からは土師器91点が出土した。このうち、土師器７点を図示した。

床面やＰ１の底面からは土師器が多く出土している。Ｐ１の北東側には図22－６の甕が正位で据

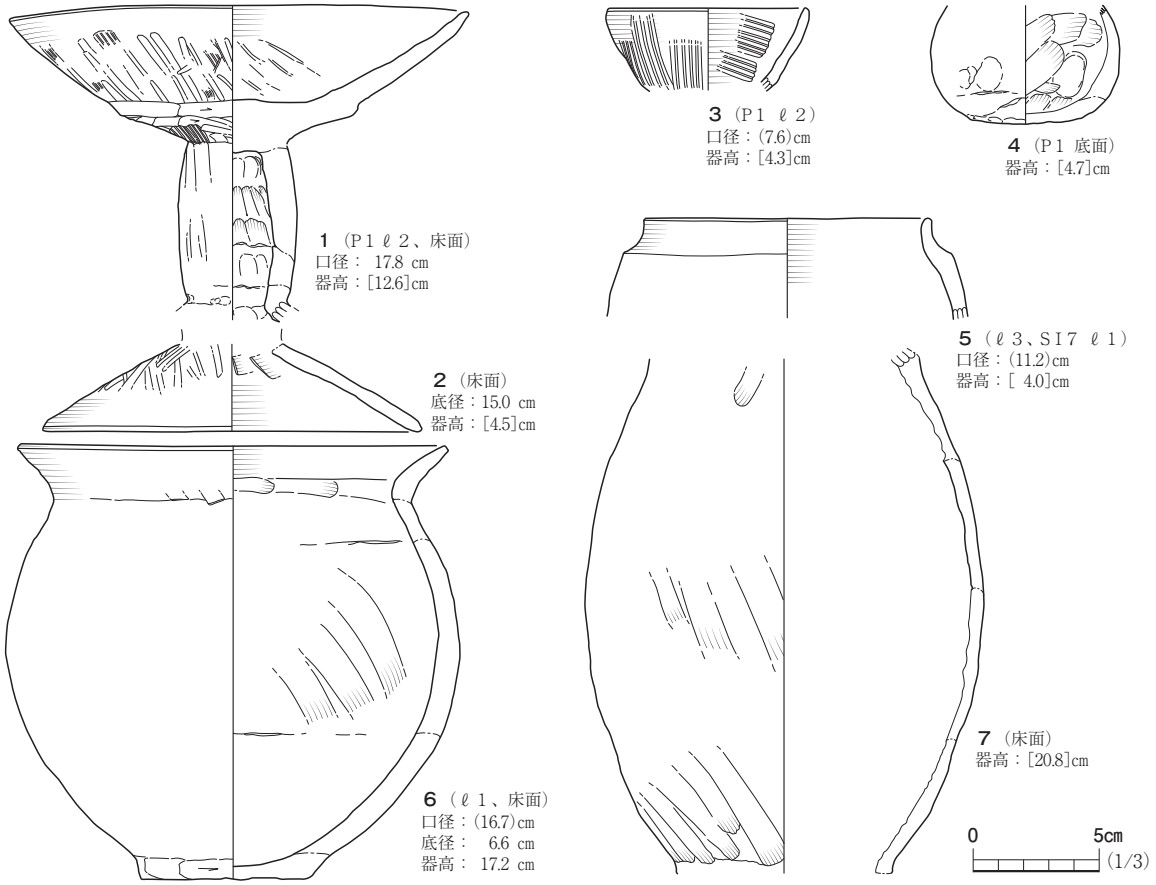



**図22**　12号住居跡出土遺物

え置かれていた。調査区壁付近には図22－１・２の高杯や、図22－７の甕がまとまった破片で出土している。Ｐ１の底面からは、図22－４の壺が出土している。

図22－１・２は土師器の高杯である。接合はしないが、同一個体の可能性がある。１は脚部から杯部にかけて遺存している。脚部は中空となり、杯部は下位で段を持ち、口縁部に向かって直線的に立ち上がる。脚部は外面にヘラミガキ、内面にはユビオサエ・ユビナデが施されている。杯部は内外面にヨコナデやハケメ、ヘラミガキが施されている。外面の調整は古い順からヨコナデ→ハケメ→ミガキである。外面の杯部と脚部の接合箇所はハケメ、ヘラケズリが施され、段は横位の連続したヘラケズリにより整形している。２は裾部である。底部に向かい「八」の字となる。内外面にはヨコナデが施される。外面にはヘラミガキ、内面にはヘラナデが施されている。

図22－３・４は土師器の壺である。３は口縁部付近で、内外面にはヨコナデ後のハケメが施されている。４は球形の体部で、内面にはユビオサエやユビナデが施されている。

図22－５は土師器の鉢とした。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部が短く直立する。内外面にはヨコナデが施されている。

図22－６・７は土師器の甕である。６の底部は平底で、体部は球形となり、頸部から口縁部は強く外反する。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。底部付近の外面には、横位のヘラケズリが施されている。７は長胴の体部で、器厚が薄く、体部中位に最大径を持つ。外面にはユビナデが施されている。内面は器壁の剥落が著しく、調整は観察できない。外面には楕円形の黒斑が観察される。

**ま と め**

本住居跡の平面形は、方形を基調としていたと考えられ、規模は東壁が遺存値で2.14mとなる。本住居跡は、粘土質の不安定な地山であるＬⅡｆ上に立地していることから、１号整地範囲による整地を行った後に構築されたとみられる。その所属時期は、出土した土師器に小型の壺と高杯の特徴から、古墳時代中期、５世紀前半と考えられる。

## 第３節　土　坑

### １号土坑　ＳＫ１（図23・24、写真31・54）

本土坑は119号水路調査区の東部、119－８グリッドのＬⅡｂ上面で検出された。牛川から南に60m程離れており、検出面の標高は8.71～8.79mである。１号遺物包含層と重複し、本土坑が新しい。本土坑の西側には３号溝跡が隣接し、北部は調査区外に位置する。本土坑は、１号遺物包含層の掘り下げ中に土師器甕の口縁部を確認したことから精査したところ、その周辺の堆積土が遺物包含層の土（ＬⅡｂ）と異なることから、再度検出作業を行い、楕円形の範囲として確認した。

本土坑の平面形は、楕円形と推測される。規模は、長径が遺存値で50㎝、短径56㎝、検出面からの深さは最大24㎝である。周壁は急な角度で立ち上がる。底面は北東側に向けて傾斜する。土

坑内堆積土はＬⅢ粒や炭化物粒を微量に含む暗灰色土の単層である。ＬⅡｂを由来とする土を用いて埋め立てたと判断した。

本土坑からは土師器８点が出土し、このうち、３点を図示した。

底面からは、図24－２の土師器の壺が横位で据え置かれ、その上から図24－１の底部が欠失した土師器の甕を覆い被せるような状態で出土した。また、壺の口縁部が、甕の下から出るように調整され据え置かれていた。

図24－１は土師器の甕である。体部は球形で、頸部から口縁部は長く外反している。口縁部の内外面には、ヨコナデが施されている。外面には、頸部に連続したヘラナデ、体部はヘラケズリが施されている。内面は頸部付近にヘラケズリ、体部にユビナデやヘラナデが施されている。

図24－２は土師器の壺である。体部は球形で、頸部から口縁部は直線的に外傾する。口縁部の内外面にはヨコナデが施されている。外面には頸部から底部にかけて丁寧なヘラケズリの後、一部はヘラミガキが施されている。内面は頸部付近に連続したヘラケズリ、底部付近にはユビナデが施されている。外面の体部上半から口縁部の一部では、赤彩が認められる。外面には黒斑が観察される。

図24－３は土師器の高杯とした。杯部は強く外反している。外面にはヨコナデやヘラケズリが施されている。内面にはユビナデが施されている。

本土坑は、平面形が楕円形で、底面からは壺が横位で据え置かれ、その上に甕が覆い被せられていた。これらの特異な出土状況から勘案すると、本土坑で何らかの祭祀儀礼が行われた可能性がある。所属時期は出土した土師器の特徴から古墳時代中期、５世紀後半である。

### ２号土坑　ＳＫ２（図23・24、写真９）

本土坑は119号水路調査区の東端部、119－10グリッドのＬⅢ上面で検出された。牛川から南に60m程離れており、検出面の標高は8.70mである。本土坑と重複する遺構はないが、北側には２号溝跡が隣接する。本土坑の南東部は調査区外に位置する。本土坑は、ＬⅢ上面の検出の際に灰色砂質土の範囲として確認した。

本土坑の平面形は、確認できた範囲が僅少のため不明である。規模は、東西方向が遺存値で76㎝、検出面からの深さは最大32㎝である。周壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。底面は中心に向け緩やかに傾斜している。土坑内堆積土は３層に分けられた。いずれもＬⅡｂを由来とし、ＬⅢ粒を微量に含んだ人為堆積土である。ℓ２には炭化物が帯状に含まれていた。

本土坑からは土師器37点が出土し、このうち、２点を図示した。

図24－４は土師器の甕である。頸部で強く屈曲し、口縁部は直線的にのびる。口縁部の外面には、ヨコナデの後ハケメが施されている。体部外面には斜位のハケメが施されている。内面にはユビナデが施されている。図24－５は土師器の鉢とした。器厚は薄く、平底から直線的に立ち上がる。底部から体部の外面には、丁寧なヘラミガキが施されている。外面には赤彩が施されている。底部の内面には連続したヘラナデが施されている。

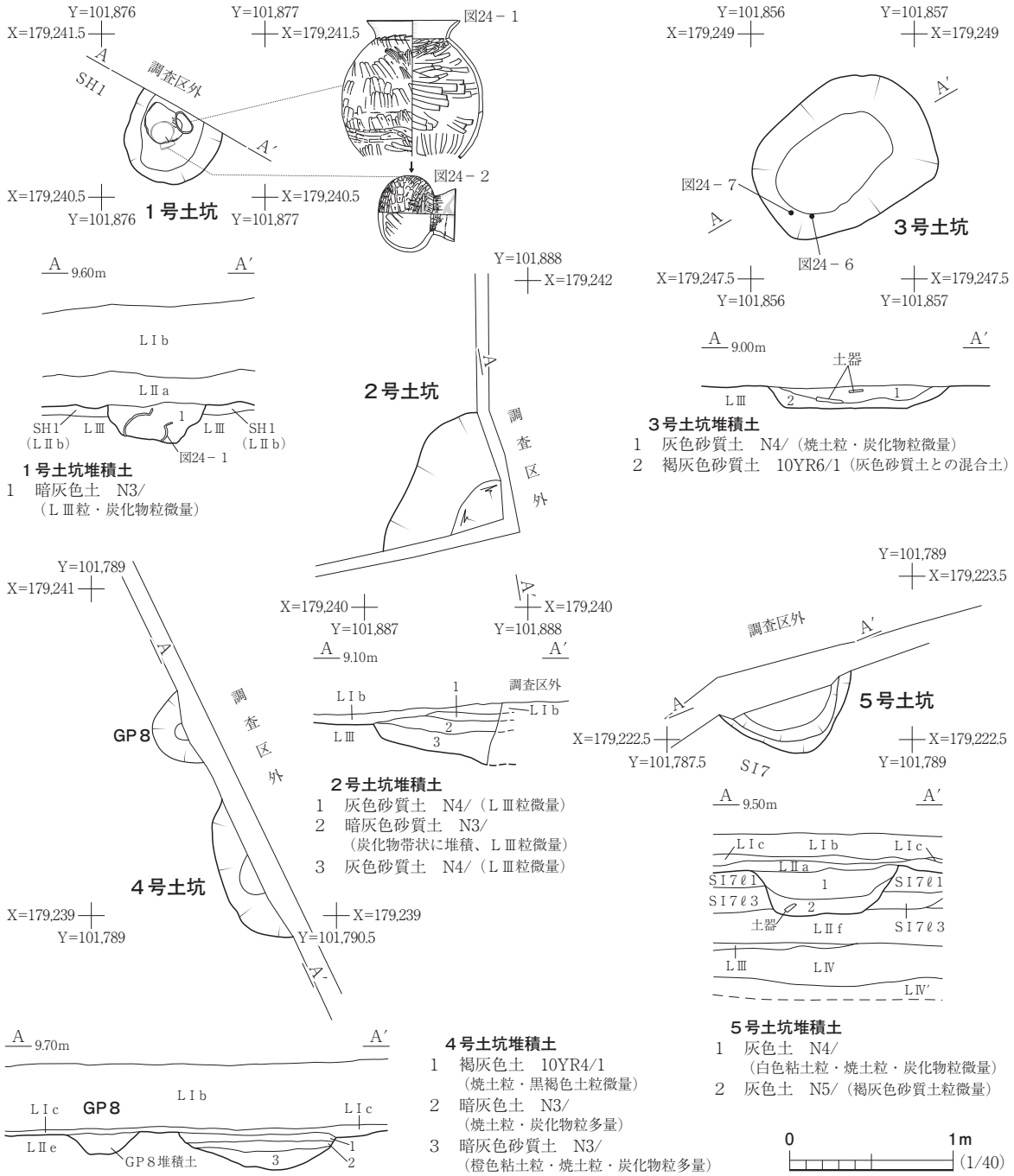



**図23**　１～５号土坑

本土坑の所属時期は、出土した土師器の特徴から古墳時代前期である。

### ３号土坑　ＳＫ３（図23・24、写真52・54）

本土坑は119号水路調査区の中央部、119－６グリッドのＬⅢ上面で検出された。牛川から南に70m程離れており、検出面の標高は8.76mである。１号遺物包含層と重複し、本土坑が古い。本土坑の西側１mには、ＧＰ７が位置している。本土坑は１号遺物包含層掘削後、ＬⅢ上面の検出作業の際に、楕円形の灰色砂質土の範囲として確認した。

本土坑の平面形は、楕円形である。規模は、長径が1.12m、短径が84㎝、検出面からの深さは最大25㎝である。周壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。底面は平坦である。土坑内堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅡｂを由来とする灰色砂質土で、焼土粒や炭化物粒を微量に含む。本土坑のくぼみに１号遺物包含層が堆積したものと判断した。ℓ２は褐灰色砂質土とＬⅢを由来とする灰色砂質土の混合土である。土質の性状から人為堆積土と判断した。

本土坑からは土師器３点が出土し、すべてを図示した。

図24－６・７の杯は、ℓ１の上面から出土している。６は逆位に、７は斜位に出土している。

図24－６・７は土師器の杯である。６は厚手の丸底で湾曲しながら立ち上がり、中位に段を持ち、口縁部に向かい直立する。内外面には、ヨコナデが施されている。底部付近の外面には、ヘラケズリが、内面にはヘラナデが施されている。７は厚手の椀形で、底部から口縁部に向かって湾曲しながら立ち上がる。内外面にはヨコナデが施されている。体部外面にユビナデ、底部の周縁には連続したヘラケズリとユビオサエが施されている。内面にはヘラナデが施されている。

図24－８は土師器の甕である。平底から湾曲しながら立ち上がる。全体的に摩滅しており、調整は判然としないが、外面にヘラケズリ、底部内面にユビナデが施されている。

本土坑は平面形が楕円形で、１号遺物包含層の形成に伴い埋没したものとみられる。所属時期は出土した土師器の杯（図24－６）の特徴から古墳時代中期～後期、５世紀後半～６世紀前葉である。

### ４号土坑　ＳＫ４（図23、写真52）

本土坑は115号水路調査区の中央部、115－15グリッドのＬⅡｅ上面で検出された。牛川から南に100m程離れており、検出面の標高は9.16mである。本土坑と重複する遺構は無いが、北側に隣接して５号住居跡やＧＰ８が位置している。本土坑の東半部は調査区外に位置する。本土坑は、ＬⅡｅ上面の検出作業の際に、焼土粒などを含む褐灰色土の範囲として確認した。

本土坑の平面形は、楕円形と推察される。規模は、長径が遺存値で95㎝、短径が遺存値で22㎝、検出面からの深さは最大22㎝である。周壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。底面は平坦である。土坑内堆積土は３層に分けられた。いずれもＬⅡｅを由来とする土で橙色粘土粒、黒褐色土粒、焼土粒などを含んでいる。土質の性状から人為堆積と判断した。

本土坑からは土師器５点が出土しているがいずれも小片の為、図示していない。

本土坑の所属時期は、土師器が出土していることから、概ね古墳時代の可能性がある。

### ５号土坑　ＳＫ５（図23・24、写真52・69）

本土坑は116号水路調査区の東端部、116－９グリッドの７号住居跡上面で検出された。牛川から南に130m程離れており、検出面の標高は9.10～9.13mである。７号住居跡と重複し、本土坑が新しい。本土坑の東側には、５～11号住居跡などが集中して分布している。本土坑の東半部は調査区外に位置する。本土坑は、７号住居跡の検出作業の際に、白色粘土粒などを含む灰色土の範囲

として確認した。

本土坑の平面形は、楕円形と推察される。規模は、東西方向が遺存値で90㎝、南北方向が遺存値で58㎝で、検出面からの深さは最大30㎝である。周壁は底面から急に立ち上がり、中位で緩やかな角度となる。底面は平坦である。土坑内堆積土は２層に分けられた。ℓ１は白色粘土粒や焼土粒、炭化物粒を微量に含む灰色土である。ℓ２は褐灰色砂質土粒を微量に含む灰色土である。いずれも土質が７号住居跡のℓ１と近似することから、７号住居跡の堆積土を用いて埋め立てたものと判断した。

本土坑からは土師器34点が出土し、このうち土師器１点、土師器転用研磨具２点を図示した。

図24－９は土師器の杯である。内外面の体部中位に段を持つ。内面にはユビナデが施されている。

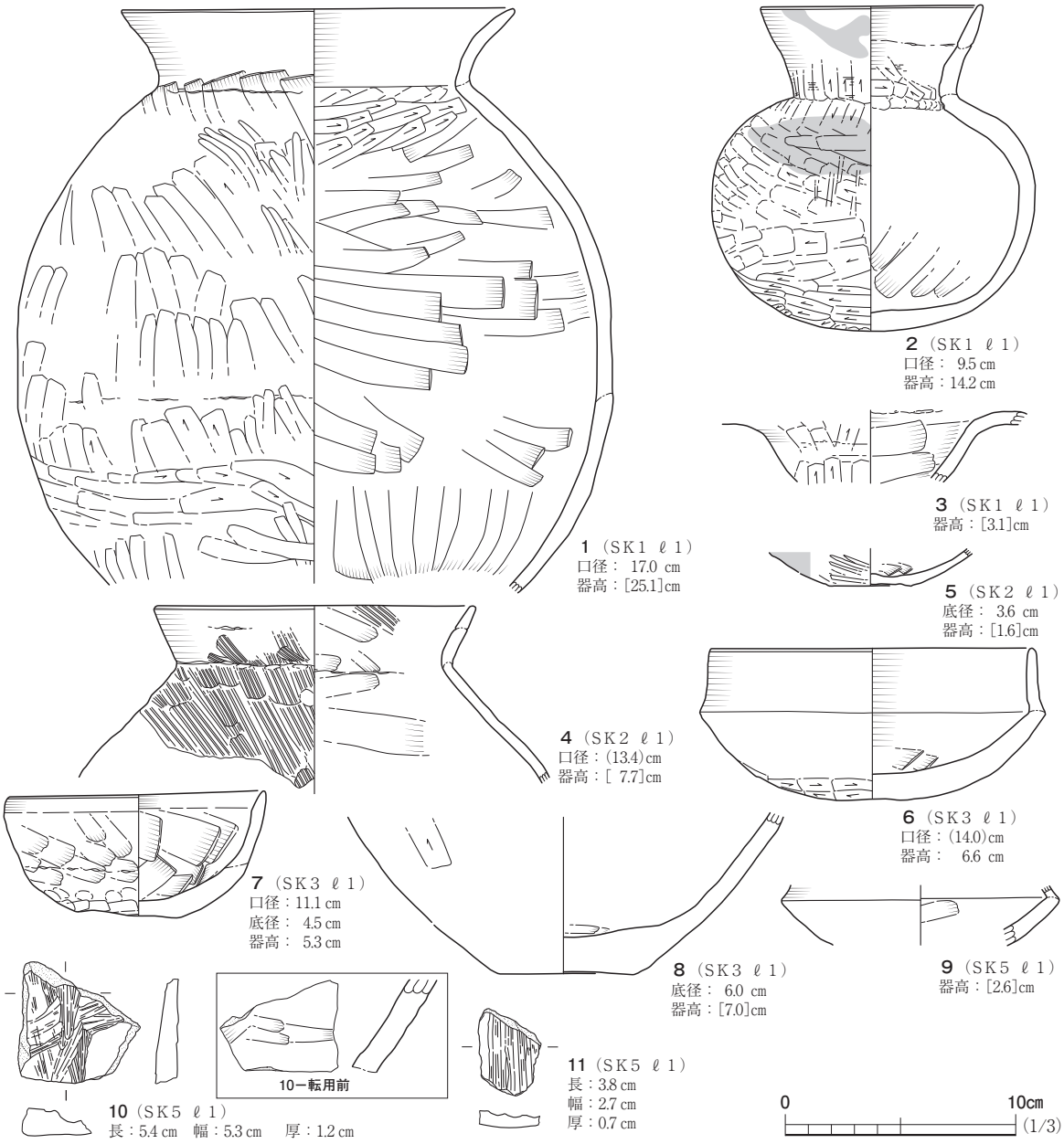



**図24**　１～３・５号土坑出土遺物

図24－10・11は土師器転用研磨具である。10は甕の体部下半の内面を転用している。研磨痕は、縦と横の概ね２方向がある。一部は断面形が「Ｕ」字形の溝状となり、中央から上側縁に向け研磨している。また、各所に浅い擦痕が確認できる。11は杯の内面を転用している。研磨痕は縦方向のみで、３条の浅い溝状となる。溝状の研磨痕の内側には、浅い擦痕が認められる。

本土坑は、平面形が楕円形と推察され、７号住居跡の堆積土を用いて埋め立てられている。出土遺物には土師器転用研磨具が２点認められることから、周辺で石製模造品・臼玉の製作が行われていたとみられる。所属時期は出土した土師器の杯（図24－９）の特徴から、古墳時代中期～後期、５世紀後半～６世紀前葉である。

## 第４節　溝跡・自然流路跡

### １号流路跡　ＳＤ１

**遺　　構**（図25・26、写真32・33）

本流路跡は、119号水路調査区の西部、119－３・４グリッドのＬⅢ上面で検出された。牛川から南に70m程離れており、検出面の標高は8.98mである。東側の上端で４号住居跡と重複し、本流路跡が古い。本流路跡の南西側12mには４号流路跡が位置している。本流路跡は南北部は調査区外に伸びている。

本流路跡は、ＬⅢ上面の検出作業により確認した。幅が長大であり、遺構の立ち上がりが極めて緩やかであること、レンズ状の堆積を基調とし、一部でラミナ状となることから流路跡と判断した。本流路跡について、水路工事の掘削が及ぶ深さまで人力で掘り下げたが、底面が確認できないことから県教委に報告し、サブトレンチを設定して底面を把握するように指示を受けた。サブトレンチを掘削したところ、地表面から1.2mのところで、木質遺物や土師器を多量に含むℓ８を確認した。再度、県教委に報告し①サブトレンチの一部をさらに深堀りをかけて底面を把握すること。②出土した木質遺物・土器について、記録を作成した上で土師器は取り上げ、木質遺物については調査範囲の外に延伸することから現状のまま保存とすること。以上の指示を受け、対応した。木質遺物は、いずれも表皮を持ち、枝の節が認められることから、自然木が流路内に溜まったものと判断した。

本流路跡は概ね南北方向に延び、長さは判明した値で2.05m、幅は最大で11.4m、検出面からの深さは最大で1.14mを測る。底面にはＬＶが露頭している。

本流路跡の堆積土は９層に分けられた。ℓ１は橙色土粒を微量に含む灰黄褐色土である。ℓ２・３は、ℓ４を由来とする土粒を微量に含む黒褐色土を基調としている。土質の特徴から、ＬⅡｃが自然堆積した可能性がある。ℓ４は、黒褐色土を斑状に含むにぶい黄褐色砂質土である。土質の特徴から、ＬⅡｄが自然堆積したものと判断した。ℓ５は灰白色土を基調とし、褐灰色砂や黒褐色砂質土がラミナ状に堆積している。また、炭化物粒が微量に含まれる。層厚は最大38cmと安定して堆積している。ラミナ状の堆積を示すことから、一定の水量があり流路として機能していた際に堆